

少年と秋の日

小川未明

青空文庫

もう、ひやひやと、身にしむ秋の風が吹いていました。原っぱの草は、ところどころ色づいて、昼間から虫の鳴き声がかれたのです。

正吉くんは、さつきから、なくしたボールをさがしているのです。
「不思議だな、こちらへころがつてきたんだけど。」

どうしたのか、そのボールは見つかりませんでした。お隣の勇ちゃんは、用事ができて帰ってしまったけれど、彼だけは、まだ、思いきれなかったのです。ボールがほしいというよりは、どこへいったものか、消えてなくならないかぎり、このあたりに落ちているものと思つたからです。

この広い原っぱには、ほかにだれも遊んではいませんでした。彼は、勇ちゃんが、スパイクを買ってもらったら、自分もお母さんに買ってもらおうお約束があるので、さつきも勇ちゃんと、その話をしていたのでした。

「ね、君は、いつスパイクを買ってもらうの？」

「お父さんが、旅行からお帰りになつたら。」と、勇ちゃんはいいました。
「君が、買ってもらったら、ぼくにも買ってやると、お母さんがいったよ。」

ふたり 二人は、早くその日のくるのが楽しみだったのです。

しょうきち 正 吉くんは、いまも、そのことを考えていると、ふいに、

「君、なにかさがしているの？」と、後方で、声がしました。おどろいて振り向くと、知らない子が立っていました。

「りゅうのひげなら、あすここにたくさんあるよ。ぼくもりゅうのひげの実を取りにきたのだ。」と、知らない子が、いいました。

「りゅうのひげ？」

「ああ、りゅうのひげさ、君、まだ知らないの？」

「僕、りゅうのひげの実を見たことがないよ。」と、正 吉くんはいいました。

知らない子は、先になつて駆け出しました。

「君、ここに、こんなになつていいるだろう。」と、足もとのしげった草の中をさしました。

そこにも、冷たい秋の風はあつて、細くて長いひげのような草の葉を動かしていました。

なるほど、手で草をわけてみると、濃 紫の小さい美しい実が、重なり合うようにしてなっていました。

「僕の妹が、ほしいというので、僕、さがしにきたのだ。」と、知らない子は、いいまし

た。

「君は、りゅうのひげの実を取りにきたのかい。僕は、ボールをなくしたので、さがしているのだ。」と、正吉くんは、いいました。

「そうか、あったかい。ないの？ 僕、さがすのは、とてもうまいんだぜ。」

知らない子は、りゅうのひげをポケットに入れて、それから、ボールをさがしてくれませんでした。

「なんだ、ここにあるじゃないか。」と、さつき正吉くんが、いくら、さがしても見つからなかったところから、拾い出しました。

「君、キャッチボールをしようか。」と、正吉くんが、いうと、

「うん、こんどしよう。妹が、待っているから、早く帰らなければならないよ。」

「君の家は、遠いの。」

「遠いけど、自転車に乗ってゆけば、すぐだ。君、いっしょに遊びにおいでよ。」と、

知らない子は、誘いました。正吉くんは、その子は、いい子だから、お友達ちになリたかったのです。

「どうしようかな。」と、ボールを握って、考えていました。

「僕、帰りに、送ってあげるから、おいでよ。」

正吉くんは、ついにゆく気になりました。その子のそばには、真っ赤に塗った二輪車が、置いてありました。正吉くんは、知らない子のうしろに乗って、肩につかまると、風を切つて、風のように、その自転車は走りしました。いくつかの、まだ見たことのない森や、まだ知らない道を通つて、やはり原つぱの中に、五、六軒あつた、その一軒の前に止まり、庭の木戸口を開けて、二人は、入りました。

「ここが、僕の家だよ、あがりたまえ。」

庭には、はげいとうや、しおんのような、秋草が咲き乱れていました。中にも、うす紅色のコスモスの花がみごとでした。縁側の日当たりに、十ばかりの少女が、すわつて、兄さんの帰るのを待つていました。その子は、病氣と思われるほど、やせていました。しかし、目は、ぱつちりとして、黒く大きかつたのでした。

兄さんは、ポケットから、りゅうのひげの実を出して妹にやると、

「まあ。」といつて、顔を上げて、喜びました。正吉くんは、なんとなく、この兄妹の仲のいいのがうらやましくなつて、自分もいつか微笑んで、二人のようすをながめていました。

「新しい、お友だちをつれてきたのだよ。」と、兄は、妹にいました。

「これから、ときどき、遊びにきてもいい？」と、正吉くんが、ききました。

「ええ、道をよくおぼえていて、いらつしやいね。」と、少女は、答えました。

三人は、その日のよく当たる縁側で、りゆうのひげで、おはじきをしました。

あちらの壁に、海を描いた、油絵がかかっていました。白い鳥が、波の上を飛んでい

ました。正吉くんは、どこかで見たような景色だと思いました。あるいは、自分が生

まれる前の世界であつたかもしれません。そのそばに、マンドリンがかかっていました。

「あれは、マンドリンだね。」と、正吉くんは、珍しそうにして、指しました。

「わたし、マンドリンひけてよ。こんどいらつしやつたら、きかしてあげるわ。」と、少女は、正吉くんの顔を見て、笑いました。

「あ、僕、もう家へ帰らなければ。」と、正吉くんは、急に、お母さんが迎えに出て、

自分が見つからないので、案じていられる姿を目に浮かべたのです。

「今度、キャッチボールをしようね。」と、知らない子は、いいました。そしてまた、自転車のうしろに正吉くんを乗せて送ってくれました。雲の間の夕日は、赤かったの

でした。

「僕、君を呼びにゆくときは、スパイクをはいてゆくから。」と、知らない子が、いいました。

その夜のことでした。

正吉くんは、ふと目をさますと、外のアスファルトの往來をカチ、カチと、スパイクの鉄を、石に打ちつける音がしました。

「あ、あの子がきた?」といって、飛び起きました。このようすを見た、お姉さんが、

「正ちゃん、いま時分、だれがくるものですか、耳のせいですよ。」といわれました。

「カチ、カチ、いうじやないか! 姉さんには、きこえないの?」

「ほんとうだわ、見ましようか?」

二人は、窓を開けて、外をのぞきました。澄みわたった、月の光に照らされて、さながら、水の中を見るような往來を、一人のスパイクをはいた子供が、駆けていました。

「だあれ?」と、正吉くんが、叫びました。

「正ちゃん、僕!」

それは、意外にも、勇ちゃんの声でした。

「勇ちゃん、どうしたの?」

「僕、スパイク買ってもらって、うれしいのだよ。」

そういった、勇ちやんの声は、たしかに、うれしそうでした。

「まあ、いま時分、どうしたの？」と、お姉さんがいいました。

「お父さんが帰っていらったから、お母さんに買ってきてもらったのだ！」

「じゃ、僕も明日買ってもらう。」

二人の少年は、月の光を浴びて、朗らかに笑いました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

初出：「児童文学」

1935（昭和10）年11月

※表題は底本では、「少年《しょうねん》と秋《あき》の日《ひ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔^{あびす}

2012年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

少年と秋の日

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>